

# NSPA JAPAN

発行人・後藤 武  
編集・広報委員会



The Natural Science Publishers' Association of Japan

## 自然科学書協会会報

年頭にあたって

理事長 後藤 武

【自然科学の時間・特ダネと苦闘】  
「坂の上の雲」に思う

(株) デジタルニューディール研究所代表  
東京農工大学客員教授 出口俊一

フランクフルト・ブックフェア 2009

出版・印刷人の集いに二〇〇名

恒例の年末集会在開催される

2010 1/15 NO. 1

<http://www.nspa.or.jp/>

社団法人 自然科学書協会 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-101 神保町 101 ビル 1階 TEL 03-5577-6301

### 年頭にあたって

社団法人 自然科学書協会  
理事長 後藤 武



明けましておめでとうございます。  
会員各位におかれましてはご健勝で  
稔り多い年になりますようにお祈りい  
たします。

今年はず年の政権交代によって政治  
が大きく変わる兆しが感じられますが、  
景気の回復を願うわれわれにどう応え  
てくれるのか、期待と不安が交錯する  
年明けとなりました。

さて、昨年末にはデンマークでCO  
P 15（国連気候変動枠組み条約締約国会議）  
が開催され、地球環境問題に対する日  
本の対応を世界中が注目しているばか  
りか、優れた環境技術をもつわが国の  
貢献にも期待が高まっています。

資源を持たないわが国は、科学技  
術立国としてしか生きる道はありません。  
戦後一貫して進めてきた科学技術  
の振興を、その方法論は種々あるにせ

よ、これからも中長期的なビジョンに  
基づいて確実に進めていくことが極め  
て重要と考えます。わが国の科学技術  
水準は、一昨年のノーベル物理学賞受  
賞で話題になった基礎的な研究分野を  
はじめ、先端医療技術やものづくりの  
分野などで世界の最前列にあり、これ  
までの発展を支え続けてきました。今  
後もそのための教育や研究に財政的支  
援を絶やさないことが求められます。

当協会も創立以来、科学技術の振興  
とその知的基盤としての図書普及に  
取り組んで参りました。しかし、近年  
はそうした活動にもかかわらず、出版  
物の販売額では低迷が続き、景況はま  
すます厳しさを増してきています。今  
後も科学技術教育の重要性を訴え、図  
書館に対する働きかけを強めるなど、  
いっそう普及活動に注力していく必要  
があります。出版界挙げて取り組んで  
きた読書推進運動についても、特に今  
年は「国民読書年」ということで、自  
然科学書を含めた一大運動に転換でき  
るよう願っています。

また、待たなしに進行しているデジ  
タル化への大きなうねりは、若い人た  
ちに牽引されてますます勢いづき、電  
子配信による書籍・雑誌の事業化も拡  
大していく勢いです。昨年来の動きで  
は、グーグルの世界図書館プロジェクト  
の問題で全世界に衝撃を与えました

が、今年も国立国会図書館の蔵書のデ  
ジタル化に伴う「ジャパンブックサーチ  
」の構想も具体的に動き出してくること  
でしょう。これらについて当協会は関連  
団体と連携しながら、出版者の法的権  
利を獲得すること、著作者と出版者  
の権益を守ることを基本に据え、流通  
を含めた出版文化の再構築を見据えて、  
的確に対応していきたいと考えています。

公益法人制度改革三法の施行に伴う  
法人改革では、できるだけ早期に一般  
社団法人にするか公益社団法人にする  
のかを見極めたうえで、定款の改定や  
申請書類の作成等、移行準備を進める  
ことにしています。また出版界のイン  
フラ整備では、複写権管理団体が昨年、  
一般社団法人出版者著作権管理機構  
（JCOPY）として一本化され、当協  
会も設立に協力し運営に参加していま  
すが、複写使用  
料の価格設定等  
はまだ各界との折  
衝も残っています。

このほかにもわ  
れわれを取り巻く  
多くの問題があり  
ます。今後とも皆  
様のご理解あるご  
協力とご支援を  
お願い申し上げます。



## 【自然科学の時間 - 特ダネと苦闘】

### 「坂の上の雲」に思う

(株) デジタルニューディール研究所代表・東京農工大学客員教授 出口俊一



「この長い物語は、その日本史上類のない幸福な楽道家たちの物語である。そのよ  
うな時代人としての体質で、のぼってゆく坂の上の青い天に、もし一朵の白い雲  
がかがやいているとすれば、そのみを見つめて坂をのぼってゆくであろう」。  
作家、司馬遼太郎氏が、小説『坂の上の雲』の「あとがき」に寄せた一節  
です。この数行から、維新後の大きなうねりの中で近代国家誕生に自らの役  
割を追い求めた青年らの気概が伝わってきます。いま若者らの、その輝きを  
取り戻すにはどうすればいいか。この物語にヒントが潜んでいるかもしれない。  
そんな気持ちで『坂の上の雲』のNHKドラマの第一部を拝見していました。

この物語の中心は、伊予の松山中学卒  
の三人です。陸軍騎兵隊を作った陸軍大  
将の秋山好古、その弟でロシア帝国のバル  
チック艦隊を打ち負かした海軍参謀の真之  
それにやがて短歌、俳句の世界に新風を吹  
き込む正岡子規です。「何をすることも東京」  
という時代の気分が若者の胸をあわだたせ  
ていた、と小説にある通り、ドラマは眩し

いくらいの躍動感に溢れていました。

NHK三〇年越しのドラマ化というだ  
けあって、毎週、楽しみにしていました。  
第二部は今年の秋ですね。NHKの力の  
入れ方は尋常ではなかったようです。歴史  
的文献を丹念に調べて時代考証を重ね、そ  
こに熟達のイマジネーションが加わって初め  
て、その映像表現がリアリティーに富むの  
でしょうか。小説のほんの数行、いや、一  
行に満たない文字をヒントに画面いっぱい  
巧な演出を見せてくれました。脚本担  
当の名前に、野沢尚氏、その諮問委員会  
に宮尾登美子さんの名前をみつめて納得  
がきました。

いくつかの感動のシーンが脳裏に焼き付  
いています。秋山家の父親の死去にまつわ  
る場面のことです。小説では、こうです。

「八十九翁が、明治二十二年二月一九日、  
永眠した。この時期、好古はフランスに  
いる。真之は、その七月に兵学校を卒業  
し、少尉候補生として『比叡』乗組になり、  
海上にあつた」と、そのみ記されている  
だけでした。NHKのドラマは、この辺を  
深掘りして役者に生き生きとした台詞を  
与えていました。

フランス・パリに留学中の好古から、外  
洋中の真之に封書が届きます。父の逝去  
の知らせです。死去から年が改まった「明  
治二四年の七月の事である」とナレーショ  
ンは告げていました。好古も真之も父の容  
体が悪化していることを知らされていない。  
父親の言いつけで、仕事に差し支えがあつ

てはならないから、知らせてはならない—  
と妻に厳命しているのです。

そして、その手紙には、兄から弟への労  
わりの言葉が読み取れました。「天命は人  
力の及ばざるところ、いかんともするにあ  
たわず」と。同封の仏文の手紙は親父の  
死亡通知状であり、欧州の風習で在欧の  
知人一〇余名に知らしめたと誇らしげに  
綴っている。そこで真之の脳裏には、父親  
との数々の回想シーンが巡ります。父親は  
幼い兄弟を前に、こう宣言します。

「よく聞け！古今の英雄豪傑はみな貧  
乏の中から生まれた。つまり、あしに働き  
がないのは、いわば子のためにやっているの  
だ。貧乏が嫌なら勉強をおし、親が偉す  
ぎると、子は偉くならん。食うだけは食  
わせる、それ以外の事は自分でおし」と。

「一身独立し一國独立す」。いい教えじゃな  
いですが。貧乏の言い訳に、福沢諭吉の「学  
問のすすめ」の真髓が滲みでている。正義  
感が人一倍強い真之に、「肝心の戦いまで  
勝ちとはつておけ。短気は損気、急がば回  
れ！」と繰り返し諭すのです。

その手紙でやつと松山の実家に帰った真  
之が、まずめつきり細くなった母をいたわ  
りながら、仏壇に手を合わせた後に、こん  
な会話を交わすのです。役どころは、真之  
に本木雅弘さん、母親に竹下景子さんで  
す。そのやり取りが泣かせます。明治の女  
性の慎ましやかな立ち居振る舞いが、とて  
も自然に描かれているところです。  
「母さん、これからどうするつもりじゃ」

「どうもせんよ。母さんは、秋山の家を守つ  
ていくけん、どうもせん」

「東京へおいでんか？母さん、ひとり置い  
どくのは心配じゃ。ワシがなんとかするけ  
ん」

「無理せんでええ、あんた海軍で忙しいけ  
ん、お勤め第一でせんならん。父さんだつ  
たら、そういうじゃろ」

「じゃつたら、兄さんと一緒に住めばええ」  
「だんだん、気持ちちはようわかつたけ、考  
えさせてもらうけんね」

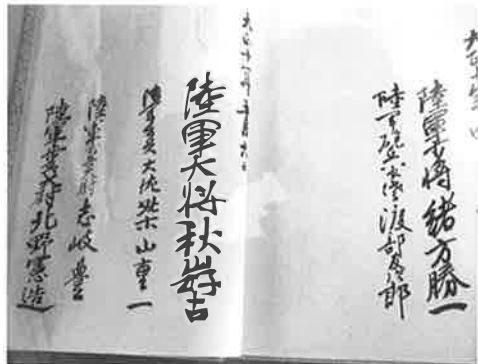
俳優、渡辺謙さんの渋く響くナレーショ  
ンに、作曲家、久石譲さんの懐かしい旋律  
がその情景にやわらかな温かみを与えます。  
いつの時代も変わらないのが親子の絆なの  
でしょうか。現代にも通じる切実なテーマ  
だと思いました。

その時代に何を語りどう行動したか、  
明治の人の自らを律する姿勢に胸を打たれ  
ます。抑えの利いた明治の女性の姿が美し  
い。これがもうひとつの明治の逞しさであ  
り、よき日本の原点なのかも知れません。

この『坂の上の雲』は、昭和四三年から  
四七年まで足かけ四年以上にわたって「サ  
ンケイ新聞」夕刊で連載されました。私  
が産経新聞社に入社する、少し前のこと  
です。そのためでしょうか、先輩から「坂の  
上の雲を目指そう」と繰り返し教え込ま  
れたものです。歴代の社長は、新年のあい  
さつなどで、その言葉を多用していました。  
司馬氏が産経新聞出身で京都の社寺や

大学担当の記者で、後に大阪の文化部長を務めていたことなどが影響していたと思います。司馬氏は、先輩の誇りであり、その折に触れた思い出は彼らの自慢話にもなっていました。これは私の勝手な推量ですが、日露戦争でロシア帝国最強のバルチック艦隊を破った日本海軍の奇跡的な勝利がいれば新聞発行部数や記者数で弱小の産経新聞がスクープ記事で全国紙を打ちまかす、という構図に似ているのでしょうか。

例えば、連日、連夜、編集局の隅のソファを囲んで飲んでいました。屋台で買ったつまみを広げて、その日のニュースをおこれこれ論じながら朝を迎えるのです。やがて経営が切迫してくると、先輩らは「飯のタネにこの稼業をやっているのではない」と虚勢を張っていました。狭い部屋は、タバコの煙で霞んでいました。その激務と不



角ばった独特の書体は、力強い好古の署名＝室蘭の日本製鋼所で筆者写す

摂生で何人が倒れたことか。

「坂の上の雲」を思うと、特ダネと文章にそのすべてを賭けた先輩や同僚らの苦闘が、まざまざと思い起こされます。

出口俊一（でぐち しゅんいち）

一九七五年獨協大学卒業後、産経新聞社入社。編集局社会部、都庁キャブなど歴任。日本工業新聞社で電子メディア部長。二〇〇二年経済産業研究所に転向、産経新聞退社後、(株)デジタルニューティール研究所を設立し代表取締役就任。〇七年から東京農工大学大学客員教授。〇二年から毎週DNDメルマガを配信。

## 2009 フランクフルト・ブックフェア

出版文化国際交流会事務局 梶原千歳

フランクフルト・ブックフェアにて、空前の規模で官民挙げた「日本年」が開催されたのは、一九九〇年。その年には日本から七四社の出展があった。交流会では、日本の出版物を海外で普及することを目的に、一九六二年からフランクフルト・ブックフェアへ継続参加しているが、「日本年」をピークに出展社数は減少し続け、二〇〇九年は四一社であった。海外とのやり取りは日常化し、一時期のように八〇〇名の日本会場や大規模な視察団が組まれることもない。国際化の中、フランクフルト・ブックフェア自体の価値が薄れているという指摘もあるが、果たしてそうなのだ

ろうか。

フランクフルト・ブックフェアには二〇〇カ国から七三〇〇社が出展し、来場者数は三〇万人近い。世界各国で年間一〇〇件ほど開催されるどの国際ブックフェアと比較しても、桁違いに大きく、国際色豊かだ。日本インフォメーション・センター（国際交流基金との共催）では、欧米諸国に限らず、アジアや中東、アフリカの出版関係者からも連日、版權の売り買いや日本のコンテンツ先など、多数の照会を受ける。

インフォメーション・センターに隣接する交流会共同ブースには、二〇〇一年から自然科学書協会、出版梓会、大学出版部協会、また二〇〇六年には日本児童図書出版協会のご協力を得て、各会員社の皆さまからご出展頂いた図書を展示紹介している。確かに、日本のポップ・カルチャーへの関心は凄まじいものがあるが、来場者の関心はそればかりではない。専門書を手取りに見入る姿も定着した。関係者に会いたいという声も多く聞かれる。

長年の出展社が口を揃えるには、ミーティングをするだけなら別にフランクフルト・ブックフェアの会場でなくともよい。しかしブースを出すことで信頼感が得られ、新規開拓にも繋がる、と言うことだ。そして、数ある取引先と一カ所で効率良く一年に一度の顔合わせができることもメリッ

トの一つになっている。



日本インフォメーション・センター

の出版社は、手さぐりでアポイントを取った平日の商談と同時に、土日の一般公開日に押し寄せた来場者の反響に直接触れたことも有意義だったと言う。一度の参加ですぐに結果が出る訳ではないが、大きな刺激になったようだ。

世界の出版関係者が一堂に会するフランクフルト・ブックフェアでは、海外へ効果的に日本の出版のプレゼンスをアピールすることが出来る。反面、そこでの出展が日本強い印象となる。出版文化の国際交流という面でも、より良い出展をしていきたいが、それにはやはり出展社の増加が欠かせない。出版社の方々には、不況な時代であるからこそ、海外で高まる日本への関心にぜひ目を向けて頂きたい。

## 出版・印刷人の集いに二〇〇名

東京都印刷工業組合出版メディア協議会主催、自然科学書協会と出版協会共催の「第二一回 出版・印刷人の集い」が、一月一九日、日本出版会館で開催された行われた。出版界の不況が続く、売上二兆円割れが確実視されるためか「出版界の現状と今後」という講演テーマへの関心が高く、昨年比べ七〇名を上回る二〇〇名が参加した。

例年通り二部構成で行われ、第一部は筑摩書房菊池明郎社長による「出版界の現状と今後―いかなる未来が出版を待ち受けるのか?」と、同社平井彰司部長の「出版物デジタル化の行方―グローバルショックと国会図書館プロジェクト」の二本の講演が行われた。

第二部は会場を出版クラブ会館に移して、専門書出版社と印刷会社の交流の場となる懇親会がもたれた。当協会の後藤武理事長が「厳しい出版業界だが、夢をもって頑張ろう」と挨拶し、大坪嘉春出版粋会理事長の乾杯の音頭で懇親会は始まった。出版界は一九九六年の売上二兆五六四億円をピークに二二年にわたって下がり続けており、出版社、印刷会社ともに打開策を模索する集いになった。

### 恒例の年末集いが開催される

当協会恒例の年末集会在二月三日(木)、東京會館で開かれ、例年通り会員社代表、専門委員会委員に、取次会社や関連団体代



表など二二二名が参加した。

開会にあたり、後藤理事長が故郷山形での「寒い冬はじつと春を待つ」という体験を引き合いに、冬のような出版不況をいろいろ工夫して春を待とうと、挨拶した。

来賓挨拶に立ったトーマンの山崎厚男社長は、出版も時代に沿った新しい形の風景を作っていくことが大事、と出版界の今後のあり方を訴えた。続いて、日本出版販売の橋昌利専務は、どうやっても売れない!と切り出し、売れない三つの要因を挙げた。一つ目は人口の減少。二つ目は、雑誌をベースにしたコンテンツが他の媒体に移行していること。三つ目は、不景気で読者が図書館や中古書店に行っていること、と同社の分析結果を述べ、出版業界が一致団結して早急に新しい対応策を構築する必要があると、挨拶した。

売上が二二年連続で前年割れが続いている出版業界、二兆円を下回ることが確実な二〇〇九年暮れの年末集会であったが、今年も出版や当協会活動の次期時代を担う新人の参加者も増え、厳しいながらも新しい息吹を感じさせる集会になった。

### 【第五九期理事会・委員会開催一覽】 (二〇〇九年一月〜二月)

#### ●理事会

- ・二月一九日(木) / 一四時〜一六時 日本出版クラブ会館
- ・二月三日(木) / 一六時三〇分〜一七時三〇分 東京會館

#### ●専門委員会・特別委員会

- ・二月一七日(火) 販売・出展委員会 / 一六時三〇分〜一七時三〇分 文化産業信用組合
- ・二月一日(火) 総務委員会 / 一二時〜一四時三〇分 自然科学書協会事務所
- ・二月一日(火) 広報委員会 / 一六時〜一七時 文化産業信用組合
- ・二月三日(木) 公益法人特別委員会 / 一五時三〇分〜一六時三〇分 東京會館
- ・二月二八日(金) 研修委員会 / 一四時〜一六時 日本出版クラブ会館

#### 【その他】

- ◆二月一九日(木) 出版・印刷人の集い / 一六時三〇分より 日本出版会館・日本出版クラブ会館
- ◆二月三日(木) 年末会員集会在一八時より 東京會館

◆一月二四日(木) 新年会員集会在一四時 日本出版クラブ会館

### 第五九期 / 第六〇期広報委員

- 〈担当常務理事〉 新谷滋記(工業調査会)
- 〈委員長〉 竹生修己(オーム社)
- 〈副委員長〉 長 滋彦(技報堂出版)
- 田中久米四郎(電気書院)
- 瀧原恒平(朝倉書店)
- 高杉 昇(家の光協会)
- 竹西素子(オーム社)
- 大井隆之(コロン社)
- 三宅恒太郎(彰国社)
- 遠矢良太郎(南江堂)

### 編集後記

科学の発達は、人類の飽くなき探究心の結晶であることを痛感した小説を最近読んだ。よく切れて刃こぼれせず、さらに気品のある日本刀を作るために刀鍛冶がいかにして鉄を鍛えたのか。それは師匠からの継承や本人の創意工夫によって、粗鉄の中の炭素含有量を調整することであった。たまに写真などで紹介されるが、刀鍛冶が赤い鉄の塊を大小の槌で叩いている作業がその中心である。それ以外にも、粗鉄の選び方や火床の造り方、炭の種類、風量の調整など、当時はすべて伝承と創造力にもとづく本人だけの技術に拠った。山本謙一氏の「いっしん虎徹」には、そうした先人の苦心が余すところなく展開されている。続いて読んだ『火天の城』は建築技術であるが、また引き込まれた。科学技術として確立するには、このような名もなき職人たちの膨大な経験が蓄積されていたのだらうと思うと、好奇心を持つことの大切さを改めて思う。(T・N)